

「現地を訪問して想うこと」

昭和 43 年 (1968) 3 月

文学部哲学科心理学専攻卒業

飛松 克周 (とびまつ かつひろ)

参加意図

- 1、 広島原爆の被爆者としての視点
- 2、 テレビジャーナリストとしての視点
- 3、 上記 2 点を踏まえての立命館への提言

感想

校友課・福島県校友会共に全力でツアーをフォローし誠心誠意さが滲み出ていた。

被災した校友は大変な日常を送りながらお見舞いに来た我々に感謝し、お土産まで頂いた他見学に行ったリンゴ園では入場料を固辞された。東北の人情を感じた。

被災した校友の話は朴訥とした中に演技では無い迫力を感じた。やはり「百聞は一見に如かず」は本当です。

もっと多数の校友の話が聞きたかったし、出来れば仮設住宅へも行ってみたかった。

原発被災現場により近づき実態を見たかった。

テレビの限界を悟ったし、今までの報道は一部しか伝えてないし取材者・編集者の偏向を感じた。

結論

少し乱暴ですがまとめます。(詳細については後日機会があれば発表します)

- 1、 津波被害の復興は当然の事ですが福島県においては、原発事故・放射能被害の救済を最重要課題にすべきである
- 2、 一番の救済策は「風評被害」の払しょくです。

立命館への提言

福島県と立命館大学の復興連携協定について

- 1、 福島へ職員・学生・校友の常駐、宿泊機能を持つオフィスを作る。
空港・新幹線駅を有し、福島県で人口が一番多い郡山市が適当。
京都～福島で無料チャーターバスを定期的に運行する。
理工学部を中心に放射能教育啓発プログラムを作り参加した学生には単位を与え、申し出により資金援助をする。

この講座は、職員・校友・地元住民へ公開する。
主婦の放射能不安へ対する払拭(食材を購入するのは女性特に主婦である)

2、 風評被害と闘う女性集団を作る

放射能に対する不安は知識不足であり分からない物には近づかないと言う本能に近いものである。これが区別であり、差別へと変化してゆく。

被爆地広島は現在は顕在化していないが、いまだに差別は存在する。十数年前までは就職・結婚など明らかにあり、一部の人は闘っていたが、大半の人は忍従し、我が身を嘆いた。被爆者が全員死亡するまで続くだろう。

差別は解消されず、拡大再生産されてゆく。被爆者は年々マイノリティに成っており新しい市民は従来 of 差別を容認し差別する側に成って行く。行政も援護はするが、差別解消啓発活動は行っていない。